

13. 小児歯科臨床における局所麻酔について

○橋本 敏昭（北九州市・開業）

木村 光孝（九歯大・小児）

局所麻酔法は歯科治療を無痛的に行うにあたり、必要不可欠な術式である。とくに小児歯科臨床においては、小児に不必要な疼痛を体験させることなく、協力的に治療を進めていくうえで重要な要素である。

無痛的歯科治療を行うことの重要性を考える一方で、局所麻酔の合併症にも十分な考慮をはらう必要がある。小児歯科領域では、咬傷、血腫、麻酔剤中毒などがあるがとくに咬傷の頻度が高く、程度によっては摂食困難となったり、粘液嚢胞の原因にもなる。また、伝達麻酔時には患児が不意に動いたために注射針が破折するなどの危険を伴ったり、麻酔の奏効範囲が広く長時間に及ぶため、ときには顔面皮膚にかき傷を作ることもある。このような合併症を防ぐためには、安全性が高く、術中は十分に麻酔効果が現われ、しかも術後には速かに覚醒するような麻酔法を選択することが大切である。

解剖学的観点からは、一般的に刺入時の疼痛が少なく根尖孔にも近いので刺入点として適しているといわれている齦頬移行部には、永久歯歯胚の骨孔が開いており、血管、神経および痛点多いので安全とはいいがたく、歯根吸収がみられる乳歯に対しては刺入部位としては適当でない場合がある。

以上の理由により、日常臨床に頻繁に行われている局所麻酔法に関して麻酔法、刺入部位などについて今回再検討を行った結果について報告する。